

<実行委員より>

今年度最初となる本講座は、昨年度に引き続き、対面とオンラインを併用したハイブリッド形式で開催いたしました。今回の講師には、小学校で日々実践を重ねておられる芳澤比奈子さんをお迎えし、4年生社会科の単元「自然災害からくらしを守る」の発展的な学習について、ご講演と実践報告をいただきました。

講座の前半では、関東大震災を取り上げた授業実践をもとに、災害に関する歴史的事象を単に学ぶだけでなく、それを現在のくらしや命を守る行動へとつなげる学びの設計について、詳しくご紹介いただきました。特に、児童が「自分ごと」として捉えられるようにするための教材開発や、地域の実情を生かした学習活動の工夫など、日々の授業に生かすことのできる具体的なアイデアが多く盛り込まれており、大変参考になりました。

講座の後半では、参加者同士が意見を交わしながら、「社会科の授業において、何を、いつ、どのように扱うか」といった実践的な視点についても深めていきました。立場や地域の異なる実践者同士だからこそ生まれる視点の違いや、それぞれの学校現場に根差した工夫に触れることで、自分自身の授業を見つめ直すよい機会となりました。また、オンライン参加の方々もチャットやブレイクアウトルームを通じて活発に意見を出してくださり、対面・オンライン双方にとって充実した時間になったと感じております。

今年度初回の講座として、学びのスタートにふさわしい非常に濃密で実りある時間となりました。芳澤比奈子さんには、ご多用の中、貴重な実践をご紹介いただきましたこと、心より感謝申し上げます。今回の学びを今後の授業づくりや校内研修に還元し、子どもたちのより深い学びにつなげてまいりたいと思います。

<参加者からの感想>

このたびは貴重な学びの機会をいただき、誠にありがとうございました。講座を通して、関東大震災における朝鮮人虐殺の事件について初めて知り、衝撃を受けました。同時に、地域の素材と絡めて4年生でこのような歴史的事実をどのように扱っていくかという難しさも実感しました。児童の発達段階に応じた伝え方や、背景への理解を深める視点など、多くの気づきを得ることができ、大変有意義な学びの時間となりました。今後の卒論研究や授業づくりにも活かしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。(Hさん・学生)

本日は、授業づくり講座に参加させていただき、ありがとうございました。

社会科の授業への見識が深まるとともに、私自身の研究テーマとも関わる内容であったため、参加者の皆様との対話を通して、有意義な時間を過ごすことができました。

このような、貴重な機会をいただき、ありがとうございます。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。(Nさん・大学院生)

この間支部例会の交流会で、中学特別支援学級で指導している方から、「関東大震災の朝鮮人虐殺をやりたいと思っているんですが」という相談を受けました。その際に、「佐藤幸二さんの小4の実践で防災教育の延長上でやっていて参考になるかもよ」と答えました。今回の芳澤さんの報告と重なりました。そして、会場で宮崎令子さんが佐藤さんのレポートを配っていたから同じことを考えていたんだなと思いました。芳澤さんは冒頭で「学習指導要領にない」という話や、周りからの批判についての話がありました。「関東大震災時の朝鮮人虐殺」については、小学校ではわかりませんが、高校の教科書には記載があります。小学校でやらなくても遅くとも高校で学習できます。ただ、現代的諸課題として、ヘイトスピーチや嫌韓など、日朝関係を悪くするような問題があります。そのため、「関東大震災時の朝鮮人虐殺」の小・中・高一環とした学習があってもいいと思います。小学校で学習した内容の中・高で詳細を学習し深めていけば、事実を学ぶことで、「差別をしてはならないこと」。そして、交流の重要性など気づくことができると思います。(Tさん 高校教員)

芳澤さんのこの授業における目標は「関東大震災で起こった出来事から、災害時に起こる可能性のある様々な問題に気づく。虐殺された人々を今も慰霊する人々がいることを知り、災害が起きたときにどのようなことに 気を付ければよいのかを自分なりに考える。」であるが、子どもたちの感想を読んでみてわかることだが、この目標を達成できていると思う。地域のことをよく調べ、小学4年生の認識の力をふまえた、社会科の授業だったのではないかな。

今日のブレイクルームでの話合いでも、ある小学校の先生が、この社会科部会の授業研修会の議論は古いのではないかな。今こういう授業研修会ではもっと授業の中での子どもたちがどうだったかにフォーカスして議論することが多いと述べられていた。

芳澤さんは、ご自身の周囲がこんな状況で気が重いかもかもしれないが、少し外に目をむければ芳澤さんの地域での議論が相対化されると思います。芳澤さんにエールをおくりたい。(Tさん・特別支援学校講師)

今回の講座を通して、改めて授業の題材選びの大切さに気づかされました。授業の展開について、「関東大震災」を扱うことに対して反対する意見があった、学習する学年に合わせての授業内容の選定が難しかった、とのことでしたが、実際の授業だけでなく、授業題材を選定し、子どもたちに寄り添ったものにするためにはどのような観点から取り入れれば良いのかなど、授業準備の段階も教員の腕の見せ所だと感じま

した。

また、「時にはできるものでやってみる、という勢いも大切」、ということが印象的でした。小学校では特に、この学年でこの内容は扱えない、などの制約が多いように思いますが、その中でいかに子どもたちに話題を提供することができるかが重要だと感じました。しかしその一方で、「フラットに考えさせる」ことの大切さも学びました。あくまで事実を伝えることに重きを置き、想いを込めすぎないようにしなければならない。私は伝えたいことがあると視点や考えが偏ってしまいがちなので、この点は特に意識していきたいと思いました。

また、今回の実践報告は、歴史教育とも繋がるものがあるのではないかと思います。外国籍の子どもたちもクラスにいる中で、虐殺などの話題を扱う際には、やはり少しは気を遣う必要があると思います。しかし、日本史の内容を軽くしか扱わない、というのは少し違うと思うし、かと言って日本の視点に偏った内容にもなってはいけないと思います。話し合いでも話題になりましたが、「フラットに考えさせる場」を創ることができるかが、教員に問われていると思います。授業の展開方法については、今後大学で詳しく学んでいきたいと思っています。

以上のことをふまえ、先生方に伺いたいのは、「授業題材を探し、選定する際に特に意識していること、気をつけていることはどのようなことか」です。実際の授業準備の様子を教えていただければ幸いです。

現役の先生方や他大学の学生の皆さんとの交流の機会はとても貴重な時間だと思います。私は歴史教育などの社会科の授業づくりに興味があったため、今回の授業づくり講座に参加させていただきましたが、今後も社会科に限らず様々な団体の活動に参加したいと思っています。(Nさん・学生)

歴史を学んでいない小学校4年生の段階でも、少し違った側面に着目すれば「朝鮮人虐殺」という難しいテーマを扱い、子どもたちに考えさせることができるということを教えてくれた実践でした。教材のどの面を授業で扱うか考えることの重要性や児童の理解を助ける教員の足場がけの工夫を学びました。また、ディスカッションの中で、実践の中の昔話に着目して「顔を知って話していれば噂に振り回されることもない」というお話をされている方がいて、人権教育などを考える上でも重要な指摘だったと感じました。

差別や迫害の歴史を教えることに難しさを感じてしまう現状で、大変勇気付けられた実践でした。ありがとうございました。(Iさん・学生)

芳澤先生、ご報告ありがとうございます。先生の授業実践をお聞きして、地元で起こった事を伝えていく授業は大切であると思いました。それが良いこと悪いことに関わらず、自分が今住んでいる地域であったことを知るということは、地域愛を育てうるの

はもちろん、引っ越し等した後もその居住地域に感心をもつことにも繋がるだろうと推測します。広島長崎の原爆については国民全員が考えるべきことでありますが、戦後80年も経っていますから、どこか他人事のように遠く感じることもあります。そこで、身近な地域を取りあげると、大幅に現実味を帯びて感じられるはずだと思いました。歴史の授業が始まる前に考える種を蒔いておくのが、自分の憧れる先生の姿と重なりました。

欠席していた子のために前回の復習から始めて授業時間が足りなくなりかける状況は頻発することかと思いますが、それでも辻褄を合わせにいく技術を修得するのは難しそうだと思いました。また、4年生と6年生の授業時間数と児童のコメントから見て、年齢による理解度の差が自分が子どものときの体感よりも著しかったのが印象的です。学年に合わせた授業展開の必要性を知らされました。

権力者の言いなりにならず、子どもたちに与えるべきであると思う教育を施す努力をしてくださる先生がいらっしゃるからこそ、教育者になることを夢見る若い世代が育ち、教育が良い方向へ発展していくことを祈ります。(Uさん・学生)

<講師の芳澤比奈子さんより>

6月講座では様々な校種の方や学生さんからもご意見をいただき、大変勉強になりました。

歴教協に入り、地域の歴史を教材化する面白さを教えてもらいました。教科書に載っている歴史が全てではなく、自分たちの住む地域の名もなき人々が歴史を作ってきたことは、子どもたちにとっても興味深く、歴史を自分事として捉えられると思いました。ただ、「この事実を知ってほしい!」という自分の思いだけで授業を進めてしまったという反省もあります。

また、「その後の生活の中で子どもたちが韓国の人々への思いに変化があったか、地域の外国ルーツの方との関わりなどがあったのか」という質問もありましたが、授業だけで終わらせず、意図的に子どもたちの生活とつなげていくことが必要だったと思いました。

今回の講座では、「虐殺」という事実を扱うにあたり、子どもの実態から始める授業づくりや発達段階に合わせた単元の選択など、参加者の方々から多くのヒントをいただき大変勉強になりました。教師の願いがありながらも、子どもたち自身が、歴史の背景を思考したり発見したりしながらより良いくらしをつくっていきたいと思える授業になるよう、これからも勉強していきたいです。このような機会をいただき本当にありがとうございました。